

①漢字

解答

- (一) ② (二) ④ (三) ③ (四) ① (五) ②
 (六) ④ (七) ① (八) ④ (九) ③ (十) ③

解説

「空気を入れかえる」↓「換気」など、同訓異字の書き分けには、同じ意味の熟語を思い浮かべるようにするとよいでしょう。

(四) 「せいぎよ」。①「ぼうぎよ」、②「ごしよ」、③「おんちゅう」、④「おやじ」。

(五) 「しごく」。①「きよくと」、②「ごくじょう」、③「ほつきよく」、④「りょうきよく」。

(六) 「冒険」。①「検査」、②「研究」、③「真剣」、④「険悪」。

(七) 「抵抗」。①「抵触」、②「低音」、③「底辺」、④「堤防」。

(八) 「乗り換える」。①「替える」、②「変える」、③「代える」、④「入れ換える」。

(九) 「架ける」。①「掛ける」、②「懸ける」、③「架ける」、④「欠ける」。

(十) 「後世」。①「攻勢」、②「厚生」、③「後世」、④「構成」。

②口語文法

解答

- (一) ③ (二) ② (三) ③ (四) ② (五) ④
 (六) ② (七) (a) ① (b) ② (八) (a) ③ (b) ④

解説

(一) 文節は文の中でそれぞれにはたらきをもち、このはたらきをもった各文節を「文の成分」といいます。「文の成分」には主語・述語・修飾語・接続語・独立語の五種類があります。「学校で」という文節は「始まる」という文節にかかり、どこで「始まる」のか説明しています。このように、下の文節にかかり、その意味をくわしく説明する文節が修飾語です。

(二) 主語は、「―が」「―は」という形のほかに、「―も」「―こそ」などの形をとることもありますので、注意しましょう。

(三) 文節に分けると「私は／ア리가／小さな／青虫を／運んで／いるのを／見つけた。」となります。文節の切れ目は、間に「ネ・サ・ヨ」を入れて不自然でないところです。

(四) 修飾される語を被修飾語といいます。修飾する語と続けて読んで、自然につながるのが被修飾語です。「真つ青に―澄みきつて」は自然につながりますが、「真つ青に―さわやかな」「真つ青に―朝だ」は意味が通りませんね。

(五) 「咲いて／いる」は、前の文節「咲いて」が主な意味を表し、あとの文節「いる」は前の文節に付いて意味を添えています。このような文節どうしの関係を「補助の関係」といいます。

(六) 単独で文節を作ることができる単語を自立語といい、自立語のあとに付いて自立語といっしょになって文節を作る単語を付属語といいます。問題の文には「(ひきだし)の」「(中)に」「(クッキー)が」「(入つ)て」の四つの付属語が含まれています。

(七) 品詞には、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞・助詞・助動詞があります。名詞は活用のない自立語で、主語になることができます。(b)「とても」は活用がなく、「りっぱだ」という用言を修飾しているので、副詞とわかります。

(八) (a)は体言(名詞)に続き、(b)は命令する言い方になっていきます。

③ 古文

解答

- (一) ② (二) ① (三) ③ (四) ② (五) ④

解説

【出典】『きのふはけふの物語』

『きのふはけふの物語』は、十七世紀前半（寛永年間）の代表的な笑い話集です。作者は未詳です。

当時、明の国（今の中国）ではやっていた笑い話集の影響を受けて、こうした作品が日本でも書かれるようになりました。江戸時代初頭に安楽庵策伝あんらくあんさくでんによって『醒睡笑』せいすいしょうという有名な作品が書かれましたが、それに続いて『きのふはけふの物語』などが書かれたのです。素朴な笑い話が収められていて、後の落語へと受け継がれることとなりました。

- (一) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、現代仮名遣いでは「わ・い・う・え・お」に直します。ですから「あひける」は「あ^いける」となります。

現代仮名遣いに直す設問は入試でもよく出題されますから、不安な人は教科書などでしっかり確認しておきましょう。そのほかのルールには、

「ぢ・づ」↓「じ・ず」

・「くわ・ぐわ」↓「か・が」
・「ぬ・ぬ・を」↓「い・え・お」
などがあります。

また、「an」は「o」に直すというルールがありますから、6行目の「あらふ」は次のようになりますよ。

「あらふ」↓「あらう (rau)」↓「あろう (ro)」

- (二) 古文では主語が明確でなかったり、省略されていることがよくあるため、常に注意して読むことが大切です。

登場人物を整理しながら、傍線部までを読んでいきましょう。登場人物を○で囲んだり、線を引いたりしながら読むとわかりやすいですよ。

まずは、「あるもの」が、火事の見舞いに行ったところ、「その女房（〓その奥方）」が「何にても惜しきものは御座ないが、……何よりも惜しき」と言うのを聞いたという流れを押さえますよ。

次に、傍線部直前の「といふたるよしを（〓と言っていたいきさつを）」に注目しましょう。つまり、この部分までに書かれていた〈火事の見舞いに行つて聞いた話〉を友人に「かたり出し」ている人が主語ですから、正解は見舞いに行った①「あるもの」です。

- (三) この人が女房をほめている言葉の中の「さてさてやさしきこと

かな」に注目してください。「やさし」には、現代の（心が優しい）という意味だけでなく、へしとやかである・優美である・趣き深い」という意味があります。よって正解は、③か④にしぼられますね。

ただし、もし「やさし」という古語の意味がわからなくても、この人がほめている「女房」の言葉に注目して考えれば解答を選ぶことができます。

火事にあつた家の「女房」の言葉をほめているのですから、「女房」が「あるもの」に言った内容を整理しましょう。「女房」は、「古今、万葉、伊勢物語、これ三いろを焼きたるが何よりも惜しき」と、「古今、万葉、伊勢物語」が燃えてしまったことを嘆いています。

「古今、万葉、伊勢物語」は、代表的な古典文学作品です。身分が高いわけでもない一般人の女房が、このような古典を読んでいたこと、そして書物が焼けてしまったのを何より嘆き悲しんでいるということに表れる（教養の深さ）に、「あるもの」は驚き、その女房をほめたのですね。

よって正解は③「教養の深さ」です。

【参考】

・『古今和歌集』

⇨平安時代初期に紀貫之らによって編さんされた最初の勅撰和歌集（⇨天皇などの命令によって作られるも

の）。優美・繊細で理知的な歌が多いとされる。

・『万葉集』

⇨奈良時代に編さんされた現存する日本最古の歌集。豊か
な人間性を素朴・率直に表現した歌が多いとされる。

・『伊勢物語』

⇨平安時代に成立したとされる歌物語。作者は不明。在原業平らしい男を中心に、様々な男女の物語が和歌を中心に描き出されている。

（四）傍線部前後の「この友だちの女房」の言動から、適切な訳を考 えましょう。

火事にあつた家の女房がほめられているのを、「友だちの女房」はじっくり聞いていますね。さらに、傍線部の直前には、「**我も**家を焼きて」とあることから、火事にあつた家の女房のまねをしようと思つているのだと読み取れます。

傍線部の後の部分を読むと、その後、この女房は、過失ということにして自分の家に火をつけます。火事にあつた家の女房がほめられているのを聞いて、そのままをしようとして家に火をつけたのですから、この文脈に最も合う、②「ほめられようとして」が適切です。

（五）あらすじをとらえる設問です。火事にあつた家の女房がほめられているのを聞いた「友だちの女房」は、自分もほめられよう

と、自分の家に火をつけたのでしたね。

最後の展開まで、確認していきましよう。家に火をつけた後の女房の会話に着目します。さつそく、ほめられていた女房の言ったことをまねています。ところが無学なため、古典文学作品のことを知らず、とんでもない聞き間違いをしていたことがわかります。

「古今」「万葉」「伊勢物語」

← ← ←

「小杵」「窓菰」「伊勢摺鉢」

「小杵」「窓菰」「伊勢摺鉢」はどこにでもある安物の世帯道具で、文学作品などのような教養深いものとは縁がありません。女房はそれに気づかず、ほめられようと人まねをして恥をかいたばかりか、家を焼いてしまうという大失態を演じてしまったわけです。よって、正解は④です。

当時の一般女性では、文学作品を読むような人は珍しかったのです。

口語訳

ある人が、火事にあつた人を見舞いに行ったところ、その（火事にあつた人の）女房（＝奥方）が申したときには、「燃えてしまつても）何であつても惜しいものはございませぬが、古今集・万葉集・伊勢物語、この三種類（の書物）を焼いてしまつたのが、何よりも残念です」と言っていたいきさつを、（ある人が）友人のところへ話し出して、「いやはや、趣深いことであるなあ。（実家は）たいした身分の家でもなかつたが、きつと、昔は身分のよかつた人の娘か、それとも名のある人で（今は）身を隠している人たちなのであろう」と、この（火事にあつた家の）女房をことのほかほめたところ、この友人の女房が、じつと聞いて、自分も家を焼いてほめられようとして、過失ということにして、その夜、（自分の）家に火をつけて、すっかり焼いてしまつた。さて、翌日、知人や親類が集まつて、「いやあまつたく、不愉快なことだなあ」と言つたところ、この女房は「何であつても、特別に惜しいと思うものはないが、小杵、窓菰、伊勢摺鉢、これらの三種類が（燃えたのが）残念なことだ」と言つて泣いた。